

# 儀礼空間の表象——日本の孔子像の変遷について—— 礼拝空間——超越者と対峙する場の創造

(第六九回美術史学会全国大会)

当番機関企画シンポジウム)

守屋 正彦

はじめに

東アジアにおける文化形成は中国大陸（以下、大陸）における大河文明からはじまり、中原を支配した周王朝以降、秦が統一国家を形成していく。漢字は甲骨文字にその系統の最初を見るが、大陸の都市国家で独自の成長も見られ、秦朝に至って公式な書体「小篆」が成立していった。時代が降るに従い、漢字は大陸の周辺へと伝播していった。

大陸文化を主導的に形成していった中原から見ると、山東省は東夷と呼ばれ、秦朝以降はその先にある朝鮮半島、日本に住む異民族がこの呼称を得ている。中原における先進的な文化形成と比較すると、周辺諸国の国家形成ははるかに遅れたものであり、古代における彼我の科学力の差は、中国の史書が示すように冊封、朝貢により国家形成が進められた。

わが国は『後漢書』東夷伝に「建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武賜以印綬」とあることにより、朝貢が行われていたことが明らかである。また『魏志倭人伝』には「倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者。今使譯所通三十國。」とあるように漢のころより朝貢があり、今、二十か国が使者を使わしていると記録される。当然ながら、漢字を用い、大和王権に至る過程での文化受容が行われたのであった。『古事記』（応神天皇二十年己酉（二八九年））に従えば「和邇吉師。即論語十卷・千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。」とある。この記録について先行

研究では、千字文が完成していないことから、疑問視する見解も見られるが、国家形成の過程において、漢字と論語がほぼ同時期に受容されたと推論し、以下に論語受容とともに、儒教が我が国に及ぼしたあり方について、孔子像祭祀を中心に美術史的な観点から解釈を加えたい。

## 一、大陸における孔子像の出現

孔子（紀元前五五二～紀元前四七二）が仕えた魯の哀公は『論語』中に散見され、「為政」篇には「哀公問曰、何為則民服、孔子對曰、舉直錯諸枉、則民服、舉枉錯諸直、則民不服」に見られる。また『荀子』哀公篇、「中庸」などにその問答が記録されている。孔子廟の祖型は孔子の死後に哀公に整えられていったようである。「公元前四七九年、孔子去世、魯哀公作誄致悼、次年、因孔子故居作廟」<sup>(1)</sup>と伝えている。

その後、秦の時代には「焚書坑儒」の受難が見られたが、漢代になって、董仲舒によって国家教学として徴用されるに至り、孔子廟も整えられていったようである。このことを傍証するように江西省海昏侯墓から、西漢、日本でいう前漢時代に奉納された最古の孔子像が発見された<sup>(2)</sup>。本通信は北京日報を典拠に報じており、記事によれば棺を納めた「主椁室」西室から人物を描いた屏風が発見され、人物の下に「孔子」、「顔回」などの尊名が確認でき、最古の孔子像であることが報じられた。したがって、孔子の肖像は前漢時代には描かれていたことが明らかである。

また、孔子像と老子像が描かれた「孔子見老子」図は後漢時代とされる齊山画像第三石 第一層（武氏墓群石刻博物館蔵）に見られ、『史記』孔子世家を基にした「孔子問礼」図を表したものと想定されている<sup>(3)</sup>。肖像のほか、孔子世家が伝える伝記の場面として描かれ、絵画化が進んでいたことがうかがえる。

また北魏後期とされる懸空寺（山西省大同市渾源县）は儒、仏、道の三教を一体化し、孔子、釈迦、老子が彫像として祀られている。仏教の大陸での受容後、大陸の中で醸成された道教、儒教と仏教の共存するありかたが具体的な礼拝の形となって表れたことが明らかである<sup>(4)</sup>。

孔子が単体の肖像彫刻として制作されたことについては、一九二〇（大正九）年「日本會常會」における塚本靖講演記録「孔子の像について」<sup>(5)</sup>において「支那に於ける孔子の彫塑像は、書物に見えた所では、東魏の孝静帝の興和三年（五四一）、即今を遡ること千三百七十九年前、兗州刺史李瑋が初めて聖像を建てて十子を彫琢して、之を曲阜の孔子廟に置いたとある、初めてと云ふ字がありますから、是が初めらしく思はれる、しかしながら『水経注』を見ると、其曲阜の孔子廟の事を記した處に「夫子在西閭東向、顔母在中間南面」とあります、是は文章の上から見て多分彫塑像であるかの様に思はれる、『水経注』の出来たのは東魏よりは前でありますから、孔子の彫塑像は東魏に始まつたのではなく、その前から有つたらしい、東漢の末に出来た武梁祠の刻石を見ると、先祖の像を立體に造り、子孫が是に供へ物をする形がある、斯かる習慣が東漢の頃既にありとすれば、山東の孔子廟の孔子像も多分六朝より前にあつたものと見て差支なからうと思ふ」と推論している。このことについてのちに塚本は『東京帝室博物館講演集』第二冊に「孔子の像に就いて」を纏めている<sup>(6)</sup>。

宋濂著『孔子廟堂議』には「古者、造木主以棲神、天子諸侯之廟皆有主。卿大夫雖無之、大夫束帛以依神、士結茅為叢、無有像設之事。《開元禮》亦謂設先聖神座於堂上西楹間、設先師神座於先聖神座東北、席皆以莞、則尚掃地而祭也、今因開元八年之制、搏土而肖像焉、則失「神而明之」之義矣」とある<sup>(7)</sup>。

孔子像を礼拝本尊として祀るあり方は『礼記』『文王世子』篇に積奠、いわゆる孔子祭典についての記述がある。『礼記』はすでに漢代に成立している。『史記』高祖本記には前漢を興した高祖（劉邦）が『史記』孔子世家に「孔子葬魯城北泗上」ののちのこととして、「高皇帝過魯、以太牢祠焉。」とあることにより、高祖が孔子の礼拝をするに、大牢をもって祀ったことが記されている。大牢は天使が社稷を祀るときに犠牲を供えることを言うが、積奠がこれにあたる。

我が国へはすでに孔子を祀るあり方が成立してのちに伝来したことが明らかである。

## 二、我が国における積奠について

儒教は『古事記』（応神天皇二十年己酉）には「和邇吉師。即論語十卷・千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。」に見え、また『日本書紀』（応神天皇一六年）に「十六年春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁莫不通達。」とある。また、『日本書紀』（継体天皇七年六月）に「貢五經博士段楊爾」の名がある。これらの記録に従えば継体天皇は欽明天皇の父にあたることから仏教公伝より早くに受容したということになる。

さて、我が国における孔子像の成立は、『續日本紀』（卷第三、大宝三年二月）に「丙申。從七位下茨田足嶋。衣縫造孔子。並賜連姓。」との記述が初見である。この記事によれば、七〇三（大宝三年）に茨田足嶋が孔子像を縫つたとある。おそらくは繡仏と同様の制作によつたものである。また『養老令』学令には積奠として「毎年春秋二仲之月上丁、積奠於先聖孔宣父。其饌酒明衣所須、並用官物。」とある。

大陸における積奠について、中野昌代著「唐代の積奠について」<sup>(8)</sup>で、「積奠が唐より渡来した儀式であることはいままでもないが、唐では中祀として「祀令」に規定される国子監の重要な「祭祀」であり、日本では「学令」に規定されている。当然様々な相違がみられ、儀式の根幹をなす犠牲についても、唐が特別に飼育された大牢（牛・羊・豚）を享日の朝に屠り、礼によつて割くのに対して、日本では狩猟によつて得た三牲大（鹿・小鹿・豕）をすでに解体した状態で用いている。とくに、平安時代になり貴族社会に穢意識が浸透するにともない、三牲を忌避する傾向が強くなってゆくという状況もみられるようになる。また、唐では饋享（祭祀）↓講学という次第であるが、日本では饋享↓講学の後に宴会がおこなわれるというような違いがみられる。」とその相違を述べている。

さて我が国における積奠の記録を確認すると、平安時代中期に纏められた『延喜式』卷第二十大學寮に「釋奠十一座。二座。先聖文宣王、先師顔子。」とある。この記事によれば「二座。先聖文宣王、先師顔子。」とあることから仏座同様に彫像であるのか、あるいは孔子、顔子の木主であるのかは明らか

かでない。

また、これよりやや降る『江家次第』第五(延久四(一〇七二)年四月)には、「二月 一 積奠 近代不行晴儀、齊信卿行之、不叶時勢、仍雨儀注之、」とあり、その後段に「延久四年三月十四日甲午、權中納言源隆俊卿著仗座、被奏大学寮先聖・先師・九哲等廟像可被修補日時勘文、四月三日壬子時、件像元慶四年巨勢金岡以唐本所奉圖繪也、而年序久積破損尤多、仍所被修復也、其用途料依本寮請奏可召諸国云云、四月三日壬子、今日大学廟像奉修補、右少弁大江朝臣匡房・右大史紀成季參向彼寮行事、其料物等任本寮請奏、下給宣旨於所司・諸国也、或説曰、吉備大臣入唐、持弘文館之画像來朝、安置太宰府学業院、大臣又命百濟画師奉圖彼本、置大学寮云云、先聖・先師、古者以周公為先聖、孔子為先師、唐太宗貞觀二年、以顔子為先師、」と記述される。大学寮の先聖、先師、九哲の像が破損したため、大江匡房修理料を諸司、諸国に課したという。また、「或説曰」として、吉備大臣將來の大宰府学業院安置の弘文館の画像を百濟画師が写し大学寮に置いたと伝えている<sup>(9)</sup>。この記事からは「大学寮先聖・先師・九哲等」が祀られていた。またこれらは巨勢金岡が唐本を写した絵画であることが明らかである。また『統群書類従』第一〇輯ノ上公事部、師光年中行事に「孔子、顔子、九哲の画像を祀つたとある。

大陸における孔子廟でも礼拝空間を飾る孔子は北京の孔子廟では木主、曲阜では孔子の彫像と兩廟において相違がある。また「座」の解釈として、大陸においては、伝存する孔子像に坐像は見られず、倚像、あるいは立像であることから『延喜式』に記載の座は木主と解釈してよいであろう。

### 三、我が国の孔子像(彫像)と礼拝空間について

礼拝空間における孔子の祀られ方は我が国においても大陸同様に木主、画像、彫像が見られる。このうち彫像について現存作例では足利学校孔子像が初見である。管見の限り、現存する大陸にある孔子像は前述のように倚像、あるいは立像であり、坐像は我が国における孔子の表現とみてよいであろう。

足利学校孔子坐像は胎内墨書銘から六世座主日新文伯の代であった天文三(一五三四)年に制作をはじめ、翌年(一五三五)に完成した。大沢慶子著「足

利学校孔子坐像考」<sup>(10)</sup>によれば、像はヒノキ材寄木造、玉眼嵌入で、頭巾並びに儒服の襟に金泥が塗られている。また、像内墨書名、並びに像底部の墨書によつて、願主が執権長尾憲長と推論され、造像は六十六部清源が脇工を担当したと指摘している。また、本像を担当した仏師について、鎌倉大仏所を称する弘円の作例に通じる表現であろうと解釈している。したがって、孔子の造像については仏師が担当したと解釈したい。

さて、大陸における孔子像(彫像)について、先に掲げた宋濂著『孔子廟堂議』<sup>(11)</sup>には「古者、造木主以棲神、天子諸侯之廟皆有主。卿大夫雖無之、大夫束帛以依神、士結茅為叢、無有像設之事。」とある。これによれば「造木主以棲神」木主に神を棲まし、「無有像設之事」像有りて之を設けることなしとあることから、礼拝空間における孔子の彫像は重要視されていなかったようである。

我が国においては足利学校以前において、礼拝空間にはどのように孔子が祀られていたのだろうか。我が国の積奠については、翠川文字著「積奠(二)——孔子像」<sup>(12)</sup>に詳しく述べられている。本論文によれば、古代から続く宮中行事の積奠については孔子は木主、あるいは画像、あるいは彫像であるかは文献の記述からは、明らかにそれであると表記していない。積奠が中世以降、武家が祀るようになって、「早くは足利学校や菊池の孔子堂(一四七七年積奠)など、聖像を所蔵していたことや積奠を行ったことが明らかなくともある」と、彫像による礼拝空間の出現を述べ、「なお、明代に木主使用を前面に打ち出した中国に対して、尾張・加賀・佐竹・萩などこれを受け入れるところはあったものの、多くは像を祀つたのが我が国の特色」と指摘している。

さて、早くに孔子像(彫像)が成立したのは翠川文字氏が指摘したように、足利学校と菊池の孔子堂の像であった。菊池市にある孔子堂は同地にある菊池市教育委員会の孔子堂趾に建てられた解説に従えば、文明四(一四七二)年、二十一代菊池重朝が家臣隈部忠直信とともに孔子と門人十哲の像を祀る孔子廟(聖堂)を建て、家臣に儒学を奨励したことによる。現存していないため明らかではないが、現在では「この堂に孔子の画像と十哲の像を祭り、家臣を集めて儒学を講じ、春秋に積奠の礼を行った」と伝えることか

ら、造像については明らかでなく、近世以前では足利学校像が嚆矢と考えてよいであろう。

さて、足利学校安置の孔子像については大陸と様式が異なるため、典拠となる粉本については大陸より輸入した版本に描かれた図像が想定できる。前出の大沢慶子著「足利学校孔子坐像考」には、本像の造像の典拠となった図像の考証を行っている。論文では狩野探幽筆「孔子・二弟子図」(ボストン美術館蔵)と比較し、「その形姿をほぼ同じくすることが興味深い。儒服の襟元から下の衣がその右側部分が少したわんで内側に見える表現、額のしわ、眉をひそめ愁いをおびた顔貌表現、羽扇を持つ右手の指の開き具合、足元を包む表現など細かい点に類似することが多い」として、造像の典拠となった同様粉本の存在を指摘している。足利学校像については江戸時代に谷文晁、近代では田崎草雲が孔子坐像を絵画としている。

足利学校孔子像は基本的には杏壇図に描かれた孔子の姿を現している。宋代に著された孔伝著『東家雜記』に載る杏壇図(図1)には孔子が杏壇に座して、講義を行う様子が描かれており、その様子は頭巾を冠り、儒服をまとう姿に描かれている。

また、杏壇で坐した姿に描かれた孔子像は、玄証筆『先徳図像』(図2)に載る。玄証は平安時代の真言密教の学僧で、多くの聖教類を書写、また収集を行ったことで知られている。白描による本図は優れた画技により、古来よりの孔子像を伝えるテキストとして貴重である。

玄証本が典型であったと推論しうる傍証として、絹本着色「孔子像」一幅(図4、鎌倉時代・一二世紀、東京国立博物館)が伝来している。羽扇は見られないが、玄証本と酷似した姿形で、手前の脇息に左腕を凭れるように正面観で描かれている。これらの背景から、我が国においては大陸とは異なる、孔子坐像が成立していったと解釈できる。

#### 四、礼拝空間における孔子彫像安置の意味について

ここまでは、我が国の孔子の祭祀とその礼拝空間について、孔子像を中心に考察してきた。我が国では時代とともに、積奠を行う祭祀の在り方に変化があった。律令時代には大学寮において、積奠を行ってきた。大宝元(七〇一年)『大宝令』によって、積奠が藤原宮大学寮に始まり、久寿元(一一五四)年に大学寮が倒壊し、治承元(一一七七)年に閉鎖となり、その後は太政官庁で行われたとされる<sup>13)</sup>。宮中年中行事には積奠は二月と八月、春秋二回行われ、現在も西暦に読み替え継承されているが、恒常的な礼拝空間、言い換えるなら常設空間での催事ではなかった。このことは足利学校においても孔子を祀る大成殿が設営されるようになったのは寛文八(一六六八)年のことであった。

したがって孔子祭祀の空間が常設する事例は歴史的には林羅山の忍岡聖堂の寛永九(一六三二)年開廟が最初である。翌年徳川義直が名古屋城内に聖堂「金声玉振閣」<sup>14)</sup>を建立した。両社とも現存していないが、これまでの孔子祭祀の在り方とは異なる礼拝空間が成立したといつてよいであろう。

我が国では儒教は中世において禅宗の修養としての色彩が強く、足利学校においても庠主は禅僧であった。また五山においても儒教についての学識が評価され、それが禅僧の教養として評価されたものであった。したがって、この時代以降における儒教の礼拝空間に対する考え方は大陸とも東アジアの周辺諸国とも異なったものとなつていったと推論する。

さて、我が国と相違し、大陸では孔子が生誕し、大司寇として仕えた魯に、先述したように孔子廟がある。曲阜には孔子の末裔が住み、孔廟(孔子廟)、孔府、孔林があり、孔府は孔子歴代の直系が居宅とし、孔林は歴代の墓所であり、三孔と言われ、現在は世界遺産に登録されている。曲阜の孔廟では大成殿には孔子の肖像彫刻が拝殿の中心に位置している。一方、北京孔廟は大成殿中央に木主が置かれている。孔子廟は大陸においては孔廟、また関帝廟を武廟というところから、文廟ともいわれている。また南京では孔夫子の尊称から夫子廟の呼称がある。いずれも孔子の祭祀を行う常設の場合、

曲阜に設けられて以降、各地へと伝播していったことが窺われる。

先述したように我が国では近世に至って孔子廟が成立した。その先鞭をつけ、儒教を主導したのが徳川家康に招請された林羅山であり、また、彼を庇護し、忍岡聖堂に孔子座像(図5)ならびに歴聖大儒像(図6)を奉納した徳川義直であった。羅山には儒服をまとった肖像がみられるが、孔子廟の外観は我が国の寺院の構えであったことが推論され、また、現在の湯島聖堂の地に移転して建てられた孔子廟内の大成殿も文献資料に見られる図面からは禅宗様での建立であったと考えられる。したがって、近世当初の儒教聖殿は禅宗寺院の内陣と同様に孔子の彫像が本尊として祀られる意識があったと思われる。

また、足利学校像、忍岡聖堂孔子像(のちの湯島聖堂像)はいずれも仏師による制作であった。造像の背景を考えると、近世以前では禅宗の環境下であったことから、仏像以上に頂相彫刻(高僧の肖像制作)が隆盛であったことから、孔子もまた肖像彫刻としての造像が行われたと考えられよう。おそらくは大成殿本尊としての孔子像が、孔子坐像として成立したのも、結跏趺坐する仏像彫刻と同様の表現とみなしたい。近世における孔子廟の成立は大陸の孔子廟の大成殿に至る仰高門、入徳門、杏壇門などと模倣しながらも、大陸は塑像で作られ、倚像形式であることから、礼拝空間における孔子像の姿形は明らかに相違したものであった。

### 五、湯島聖堂における礼拝空間

我が国の場合、科挙試験を重視する大陸とは相違し、古代社会は官職が貴族による世襲となっていたため、儒教が大陸のように官職の進級に用いられたのと相違して、大学寮における宮中行事の儀式としての位置に甘んじていた。また、中世以降では禅宗が儒教を教養として学んだが、儒教自体が自立して存在する環境にはなかった。そのためか、大陸のように木主を崇拜することを重要視しては来なかった。したがって我が国の礼拝空間の在り方は仏教から学んだと解釈してよいであろう。したがって孔子像の彫像としての在り方も仏像に倣う意識が働いていたとみることができる。

一例を法隆寺に見ると、その伽藍配置は中門の中には左手に塔、右手に金

堂、中央奥に講堂が位置している。我が国の初期仏教は顕教と言い、釈迦を中心にした造形である。塔には釈迦の骨である仏舍利が納められ、金堂は釈迦の肉体を形象した如来が安置されている。釈迦の姿は大陸から学んできたが、相貌や体軀は時代様式によって変化してきた。我が国は典拠となる様式を大陸に学んで造像を行うことで、釈迦の肉体を实体化してきたといっている。おそらく我が国の造像の在り方、また礼拝空間の構成の在り方は寺院から学んだのであり、そのことが孔子廟の中心に位置する大成殿に孔子の彫像を求めた理由ではないかと考える。

孔子を木主で表すことと塔で釈迦を表すことを同義的に考えるならば、孔子像(彫像)は釈迦如来と同様に形象であるから、祈る対象が木主、言い換えるならば孔子の位牌であるか、孔子の姿であるかということになる。近世初頭の礼拝空間である大成殿には本尊として孔子の姿が望まれ、積奠が孔子に対し捧げられたと解釈できる。

さて、積奠について、湯島聖堂を例に考えをまとめた。湯島聖堂は寛永九(一六三二)年に林羅山が上野忍岡に先聖殿を建立したことに始まる。林羅山の私邸内に置かれた先聖殿には現在の湯島聖堂内陣荘厳の諸像がすでに備わっており、万治三(一六六〇)年には幕府が先聖殿、学寮の再建、正殿、杏壇門、入徳門などが整備され、元禄元(一六八八)年には狩野益信による「賢儒凶像」扁額十六面が東西両廡に掲げられ、この年十一月、第五代將軍綱吉が先聖殿に参詣し、公式行事となるに及んで幕府教学の拠点となった観がある。

元禄三(一六九〇)年、幕府は新聖堂建立を決議、昌平坂の地に聖堂建築が着工し、翌年正月に湯島聖堂大成殿が落成し、忍岡聖堂から孔子像並びに四配像が遷座され、歴聖大儒像、扁額等も移され、同年二月に移転後最初の積奠が行われた。元禄十六(一七〇三)年に大地震、火災により、大成殿、学舎が消失。孔子像並びに四配像、木主は助かったが、「賢儒凶像」扁額は焼失し、翌年十一月に大成殿が再建され、扁額も狩野常信によって改められた。

湯島聖堂における積奠の本尊は寛永九(一六三二)年に成立した忍岡聖堂の孔子坐像である。造像については三山進氏の論文「近世七条仏所の幕府御用をめぐる―新出の資料を中心に―」<sup>15)</sup>に「一、寛永九年上野弘文院 五聖人

御木像奉為彫刻、極粉色玉眼入 孔子御長式尺壹寸中尊 脇立子思顔子曾子孟子四牀御長式尺 右者前尾州太守大納言様被為仰付候 調進大佛師廿三世左京法眼康音作」と紹介しており、これによって上野の孔子廟の孔子坐像並びに子思顔子曾子孟子の四配像の注文主が尾張大納言徳川義直で、七条大仏師康音が制作したことが明らかとなった。

曲阜孔廟大成殿の孔子像は塑造であり、対してわが国では寄木造であった。湯島聖堂では寛政十二(一八〇〇)年に十哲の木主並びに「賢儒凶像」扁額が撤廃されていることから、大陸のように木主を敬仰する姿勢と異なり、孔子の姿が積奠の対象となったと解釈できる。

湯島聖堂の積奠については現在東京国立博物館に聖堂伝来品が収蔵されており、元禄四(一八九)年に湯島聖堂が竣工し、その年の二月に積奠の礼が行われ、將軍綱吉自らが経書を講じた。その折に、「祭器及び諸具もこの時諸侯に命じて調整献納せしめたため、積奠器の形式も整備された」とようであるが、次いで博物館に現存する祭器の多くは安永元(一七七)年に大火により大成殿が全焼し、諸像、諸額は焼失を免れたが祭器が全焼したとされる。このため、大成殿の祭器は「安永年間(一七七一―一八二)に元禄の制に則って再編された」<sup>(6)</sup>ものである。したがって、これらの積奠器はまさに諸侯からの献納物として、蒔絵や真鍮による当世品である。しかしながら爵や尊などは孔子の頃の時代様式を倣古した意匠である。

この時期までは林家が祭主で大学寮以来の礼拝を行ってきたが、寛政二(一七九〇)年に朱子学以外の講義が禁じられ(寛政異学の禁、また寛永九(一七九七)年五月に林家当主信敬が急逝し、以降は幕府の儒官が祭事を担当し、寛政十二(一八〇〇)年に『積奠私儀』を作成し、聖堂改革が幕府主導で進められた。

さて、我が国における積奠は江戸時代に林羅山によって、神儒一致思想が広がる。羅山は、著書である『本朝神社考』<sup>(7)</sup>において、吉田神道の神道を主とし、仏教を従属するものと説く思想を非難し、儒教と神道とを一致させた理論を展開し、儒家の間に神道と儒教思想との一致を説く者が多く生まれたのである。また神道家にも影響し、神儒一致は吉田神道を基にして、仏教を切り離し儒教的教義を導入し、新たに吉川神道が成立したのである。伊勢神道において

も、度会延佳によって儒学思想を導入し、神主儒徒とする度会神道が成立していった。

このことは儒教が我が国に本格的に受容され、神道との異化、同化を行うことによって我が国ならではの在り方が模索されたことを意味しているのではないだろうか。積奠は孔子をはじめ先聖、先師を祀る儀式をさすが、特にわが国では孔子を祀る儀式となっていた。現在の湯島聖堂では孔子を祀る積奠では生贄として鯉、そのほか積菜、酒が器に盛られ、神田明神の神主が祭官として、孔子の霊を呼び、儀式が行われる。祭器は孔子が生きた時代の銅器の様式で、二五〇〇年の時を超え、礼拝の場は過去と現在がつながる共時的な空間が演出された。

#### おわりに

我が国では、これまで述べてきたように古代の積奠での祭祀と相違し、近代では孔子が礼拝の対象となっていたことがうかがわれる。そのあらわれ方は足利学校を端緒とするが、その孔子坐像の祀り方について、記録的には明らかとなっていない。足利学校が孔子廟、大成殿を設けるのは寛文八(一六六八)年のことで、その折の整備については林鷲峯著『国史館日録』に記載されている。したがって、祭祀空間は林家の忍岡聖堂に倣ったもの推論でき、現在に伝えられる「聖廟祭場図」(明治時代)には湯島聖堂大成殿と同様に、孔子と四配を祀る礼拝空間であったことが明らかである。

湯島聖堂大成殿は元禄四(一六九)年に落成し、その年に忍岡聖堂から孔子並びに四配像が遷座した。同年菱川派により移転したばかりの湯島聖堂の礼拝空間が「聖堂之畫圖」<sup>(8)</sup>として出版されている。本図では忍岡聖堂から遷座した孔子並びに四配像が描かれておらず、画中の大成殿には厨子の中に袞服に冕冠を付けた皇帝に準ずる位階に昇格した孔子倚像が表現されている。このことについては、まだ明らかとしないが、大成殿は元禄十六(一七〇三)年に起きた大地震で焼失している。この時に孔子並びに四配像は救出されたとし、翌年に大成殿を再建し、安置したと伝えている。

湯島聖堂が開廟した当時、閑谷学校、多久聖廟で新たな孔子像が制作さ

れ、その図様は「聖堂之畫圖」の孔子廟に酷似した造形であった。湯島聖堂の孔子坐像は魯の大司寇であった孔子の姿を現し、司寇冠で位階を表している。すでに江戸時代には、大陸では孔子の位階昇格が行われており、陳鏞選、孔貞叢著『闕里志』には官位を表す表現として皇帝に準ずる袞服、冕冠の姿で描かれている。明代に成立した本書が我が国に輸入された時期は明らかではないが、寛永九（一六三二）年造像の折には知られておらず、湯島聖堂に移転した折には『闕里志』が知られていたものと想定でき、それが先述した「聖堂之畫圖」にみられる孔子像に反映したものと推論できる。

閑谷学校は藩主池田光政の命により設立した庶民教育の学校で、同地に藩主を祀る芳烈祠があり、隣接して孔子廟が元禄十四（一七〇一）年に建てられている。孔子廟内部には朱塗りの八角形の厨子を聖龕とし、金銅製の孔子倚像<sup>(9)</sup>が安置されている。殿内は孔子像だけを祀る礼拝空間となっている。また、多久聖廟も閑谷学校像と同様の姿で、聖龕も同様のつくりで、孔子倚像が安置されており、祈りの対象は孔子像に特化した礼拝空間となっていることが明らかである。多久聖廟もまた造像年代が元禄十四年で、藩主多久成文は同年『文廟記』を著し、閑谷学校同様に京都の儒学者中村惕斎に依頼したことを伝えている。

本稿ではこれまでの積奠と相違し、特に近世においては林羅山が朱子学に基づく礼拝空間を創出してきた。湯島聖堂における積奠の折には孔子並びに四配像、それに十哲の木主、その周囲に邵子、周子、程伯子、程叔子、張子、朱子の宋時代の儒者六名の画幅が掛けられる。これは朱子学が幕府教学として重用されたことを意味している。

また、大陸にみられない孔子坐像が仏師によって造像され、江戸初期にはまだ禅宗様式が表現のうえでは主導的であった。儒教の自立は林羅山によるもので、幕府教学へと進展していったもので、著書『本朝神社考』にみる仏教に依らない、神儒一致思想が近世的な新たな孔子祭祀の在り方を方向付けたものと解釈できる。

ちょうど湯島聖堂草創期に閑谷学校、多久聖廟が建立され、『聖堂之畫圖』にみる孔子像が迎えられ礼拝空間を飾ったことは、我が国における儒教の祭祀空間が孔子像に特化して構成されていったものと考ええる。

本稿は第六九回美術史学会全国大会、シンポジウム「礼拝空間―超越者と対峙する場の創造―」において、口頭発表した内容を改めて見直し、小論としたものである。ご高覧を仰ぎ、斯界の研究者のご示教、ご叱正を賜りたい。

#### 註

- (1) 『西域通覽』長征出版社、四五頁、二〇〇四年八月。
- (2) 人民網日本語版 二〇一六年一月一日「江西省の西漢海昏侯墓、最古の孔子像が発見」、二〇一七年一月二六日、「前漢・海昏侯墓で孔子像が描かれた鏡が発見」
- (3) 武氏は殷王武丁の後裔。後漢時代は任城（嘉祥県）の豪族としてしられた。武氏祠は後漢桓帝建和元（四七）年から靈帝建寧元（一六八）年頃と想定されている。  
懸空寺 2011-12-16 15:37:22 山西省人民政府外事弁公室（山西省ホームページ）  
<http://jp.eshanxi.gov.cn/visitors/travel/siteseeing/261905.shtml>
- (4) 一九二〇（大正九年）「日本會堂會」における塚本靖講演記録「孔子の像について」  
『日本美術協会報告』第7輯付録一九二〇年五月。
- (5) 「孔子の像に就いて」工学博士塚本靖、帝室博物館発行、一一三頁、一九三三年一月一日、
- (6) 『宋濂全集』第1冊、浙江古籍出版社、一九九二年二月。
- (7) 『史窓』第五八号、都女子大学史学研究室、一九七二〇八頁、二〇〇一年二月一日。
- (8) 『江家次第』第五、二二三頁、承応二年跋、京都大学図書館本
- (9) 『学校』第二号、史跡足利学校「研究」紀要、一三二―一三三頁、二〇〇二年三月。
- (10) 前掲(7)『宋濂全集』
- (11) 『川村短期大学研究紀要』一一号、二〇九―二二六頁、一九九一年三月。
- (12) 前掲、翠川文字著『川村短期大学研究紀要』一一号、二〇九―二二六頁、一九九一年三月。
- (13) 名古屋外国語大学教授鶴飼久代著「徳川義直と学問」『新修名古屋史だより』三二―三三頁、名古屋市政資料館、一一五頁、二〇一四年三月。
- (14)

- (15) 『鎌倉』第八十号、鎌倉文化研究会、一九九六年、一―四四頁。
- (16) 『特別陳列 湯島聖堂伝来 釈奠器』東京国立博物館一九九一年。
- (17) 『本朝神社考』林道春（羅山）著、改造社、一―三三八頁、一九四二年。
- (18) 「聖堂之畫圖」は東京都立図書館、玉川大学教育博物館等で画像データが公開されている。参照願いたい。
- <http://www.library.metro.tokyo.jp/portals/0/edo/tokyo-library/upimage/big/029.jpg>
- <http://www.tamagawa.ac.jp/museum/archive/1990/001.html>
- (19) 拙著「閑谷学校大成殿孔子像について」「礼拝空間における儒教美術の総合的研究」調査報告論文集』七―一八頁、二〇一四年三月。

(もりや まさひこ)





図1. 杏壇図 孔伝『東家雜記』宋

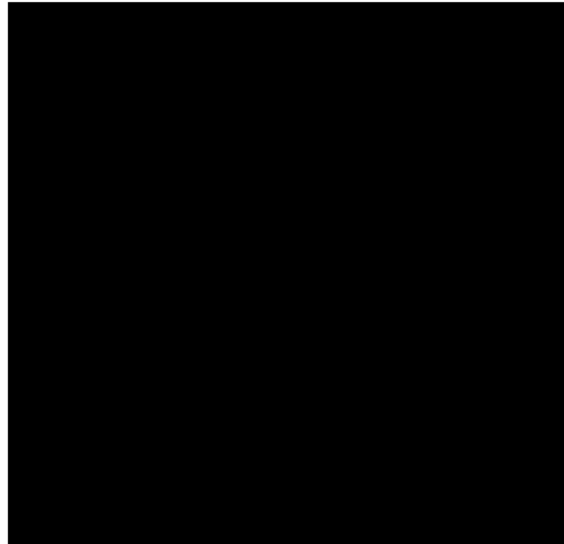


図2. 『先徳図像』孔子座像  
玄証筆 平安時代 12c 東京国立博物館

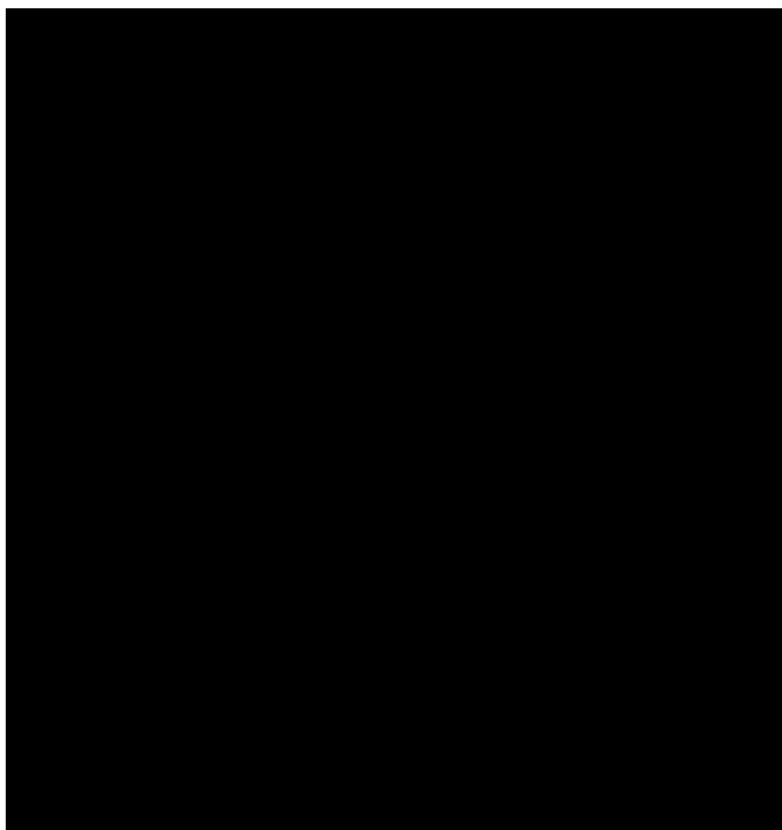
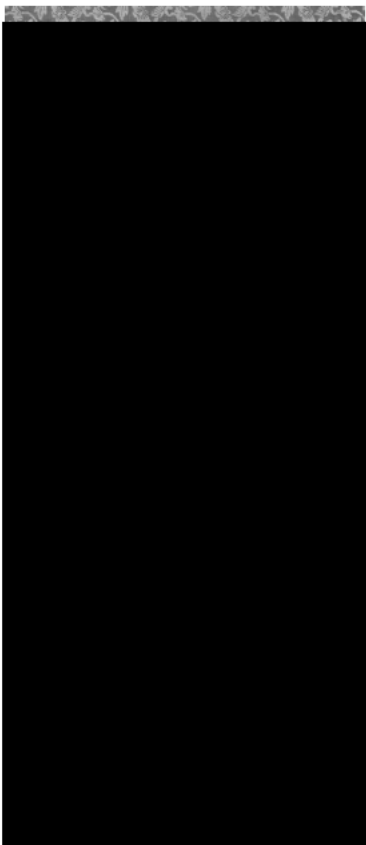


図3. 孔子家1幅 相本看巴88.9×43.5 鎌倉時代・13世紀 東京国立博物館

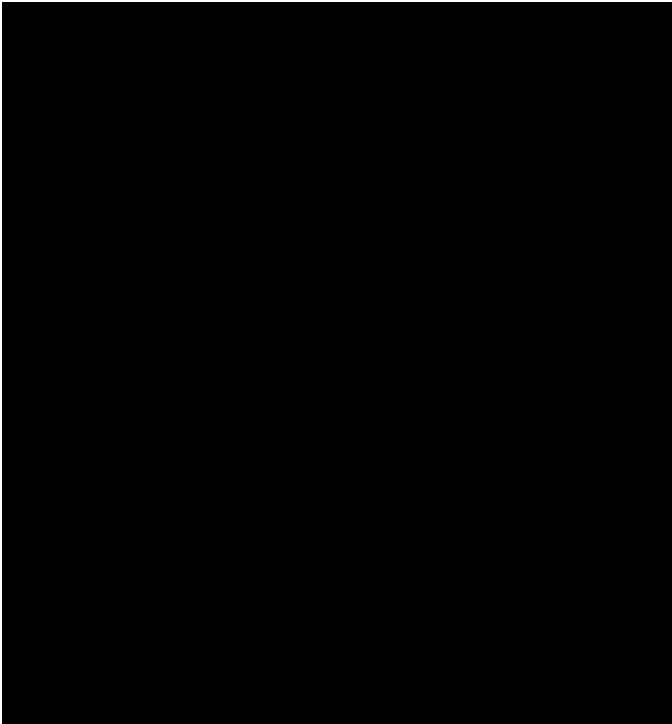


图4. 孔子倚像 明代 曲阜孔子廟大成殿

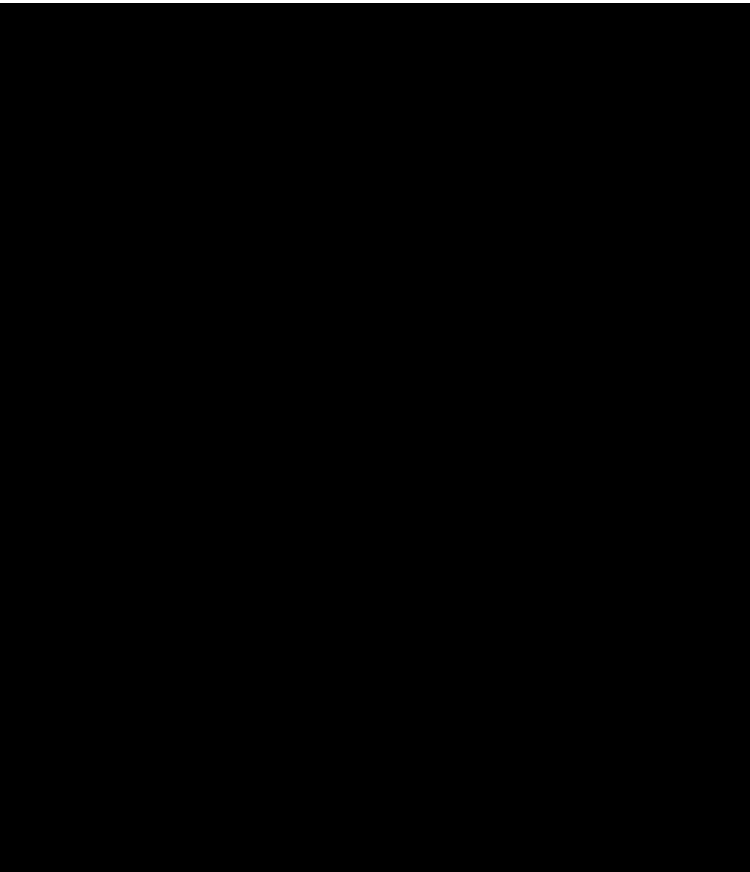
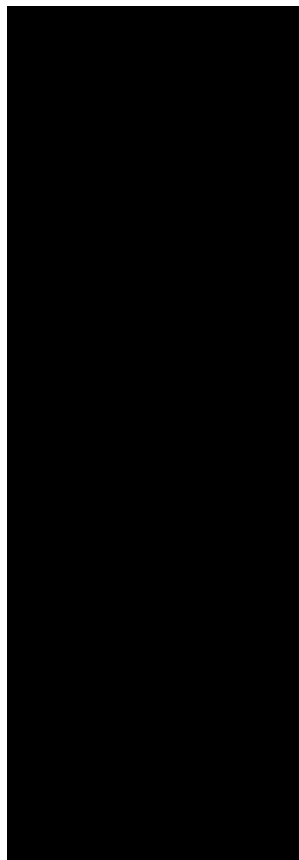
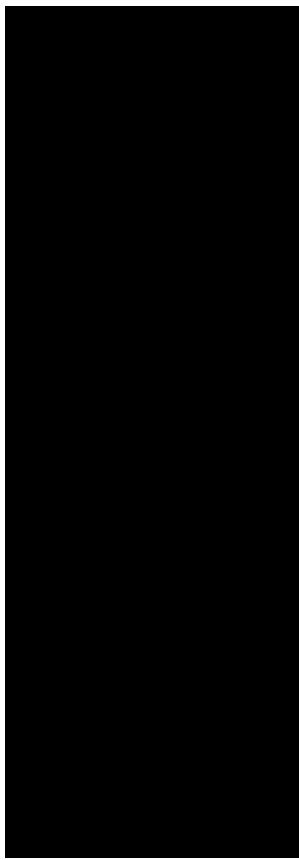


图5. 湯島聖堂大成殿 本尊 孔子像



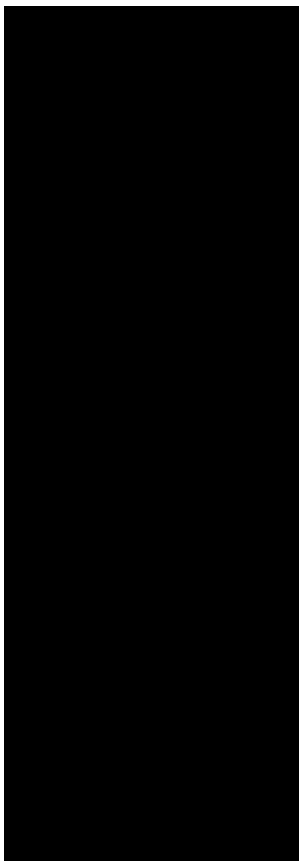
周子



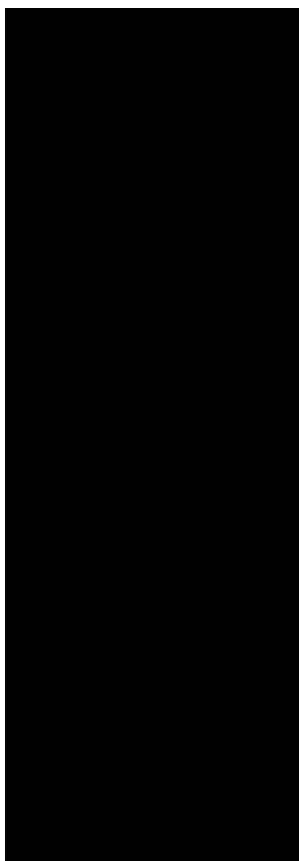
程叔子



邵子



朱子



張子



程伯子

図6. 狩野山雪筆「歴世聖大儒像」六幅 筑波大学所蔵

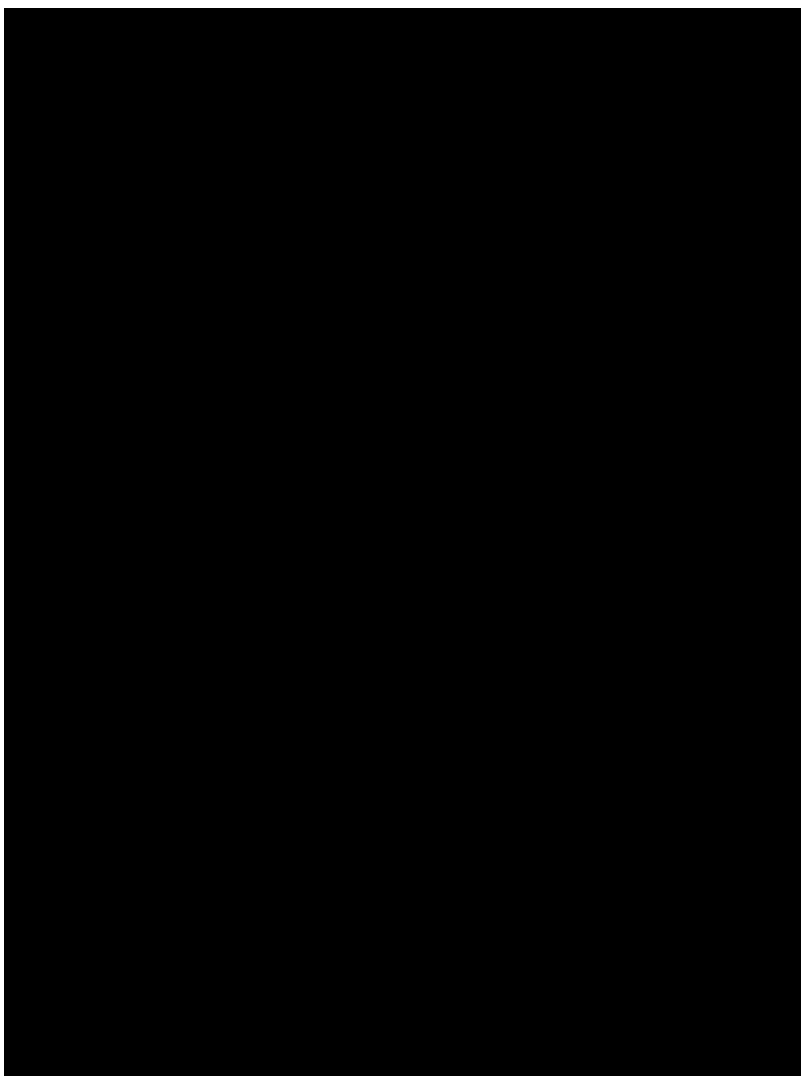


图7. 閑谷学校大成殿 孔子像